日本現代文學全集・講談社版 87

丹羽文雄 火野葦平 集

日本現代文學全集
87
丹羽文雄・火野葦平集

編集
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

昭和37年4月10日　印刷
昭和37年4月19日　發行

定價　450圓

© KŌDANSHA 1962

著者　丹羽文雄（にわふみお）
火野葦平（ひのあしへい）

發行者　野間省一

印刷者　北島織衛

發行所　株式會社　講談社
東京都文京區音羽町3～19
電話大塚大代表（941）3111
振替東京3930

印刷　大日本印刷株式會社
寫眞製版印刷　株式會社興陽社
製本　株式會社大進堂
製函　株式會社岡山紙器所
株式會社第一紙藝社
背革　株式會社石井
表紙クロス　日本クロス工業株式會社
口繪用紙　日本加工製紙株式會社
本文用紙　本州製紙株式會社
函貼用紙　安倍川工業株式會社
見返し用紙　三菱製紙株式會社
扉用紙　神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

丹羽文雄集　目次

卷頭寫眞
筆蹟

鮎……五
厭がらせの年齢……一三
爬蟲類……三三
遮斷機……一六四
崖下……二一八
うなずく……二三〇
もとの顔……二三四
お吟……二三九

作品解說……龜井勝一郎　四五〇
丹羽文雄入門……淺見淵　四五六
年譜……四六三
參考文獻……四七七

火野葦平集　目次

卷頭寫眞
筆蹟

花と兵隊……三六七
花扇……三五五
歌姫……三八七
ある詩人の生涯……四〇〇
金錢を歌う……四三三

作品解説……龜井勝一郎　四五三
火野葦平入門……淺見淵　四五九

年譜……四七〇
參考文獻……四七八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

丹羽文雄集

水急不
流月
出羽之磯

鮎

一

海棠と夕顔に雨がふつていた。俥屋が母の和緒の手紙をもつてきたので、津田は朝からの苛立つしよざいなさを吹きとばす氣で家を出た。電報で東京から呼びよせられて來たが、肝心の和緒がうちを開けはなして何處かに姿をかくしていた。大變間尺にあわない昨日來であつた。

長良川が軒下にながれている或る料亭のはなれに和緒はいた。津田が熊笹の庭を渡つていくと、和緒は障子をあけた。いつものように陽氣なほほ笑みだつたが、どこかに元氣がない。元氣がないなと、少しぐいと來るものを感じて津田は目を大きくした。それで母と子の挨拶になつた。

「朝はね、もう少しのところで守山と喧嘩するんでしたよ」

笑いながら、しかしその語氣は刺々しかつた。刺があるので、まだまだ朝の餘憤がのこつてい、自分はまだ惱つているのだという氣が津田はした。

「籍をね、わたしの籍を守山が、守山家へいれてほしいと言いだしたんだよ」

「結構じやありませんか」なんだそんなことかと安心するものがあつたが、それはそのまま押し殺して、「電報はそのことですか」こう言つたとき津田は、まるで惱つたようにぶつきら棒であつた。内心、これは本當に結構なことではないか、と座布團におさまつた。

が、和緒にしてみると心外だつた。自分の考えに味方をし、力づけ、助けになつてくれるであろうと津田を頼みにこそすれ、まさかこうはつきり逆らいはすまいと當てにしていた思惑がいつぺんに叩かれて、もう胸いつぱいになつて來る顏を暫く津田の前にじつとさせ、それから言つた。

「いやだよ。いやだよ。誰がなんと言おうと籍は移してやらないから——」

唇を歪め、泣きだしそうな瞬きを二つ三つする。張りのあるその眸に力を籠める風だつた。そうでもしなければ、和緒は津田に言い負かされる怖れがある。津田は和緒のそばにうつちやられた「主婦の友」と、「映畫と演藝」の極彩色をちよつと眩しそうに眺めやつた。

「誰がいま更入籍なんて素直にうけてやるものかね。そうだろう。守山も考えなおしてみるがいいんだよ」と和緒は少しこわい顏をした。

津田は自分が叱られに來たような氣持であつた。

「何と言われようと移しちややらないよ。斷るんだよ。きつぱりと斷るんだよ。わたしはここを一歩も離れやしない。え、動いてやるものか」

その春、守山から津田のところへ、和緒にいい緣談の話があるがどうだという風な手紙がきた。津田はこうした問題になれていないので、どうしてよいか途方に窮した。投げ出した氣でつい返事を出し遲れてしまうと、今度は和緒から、守山が何を言つてきても返事をしてはいけないと手紙が來た。それで安心して捨てて置いた。守山はいま經濟的に行き詰つているから自分との關係をきりたがつている。が今きられてはこちらが困る、もう少したてば暮しの方法が立てられるからという母の文面だつた。和緒は池の坊の師匠の腕をもち、裏千家のこれも教えられるだけの素養がある。現に四、五人

の娘に教えていた。その方法で成算が立つのであろう。

津田はこれで十數年來、和緒と妙な境遇にいる。當時やつと小學校に通いはじめた津田をのこして、和緒はある旅役者を追つた。その後、一の宮、名古屋、加納を轉々として、守山の世話をうけ岐阜に落着いてから數年になろうとする。和緒はまだ四十二歳、津田は十七の時のひとり子である。津田は小さいときから母のない人生に慣らされているので、母をさほど必要にしなかつた。一年にこの母と子は五、六度逢う。まちがつても和緒は自分の生活を津田に話さない。話されないから津田も持前のひねくれた氣遣いで、よしその氣ならと非人情に、だから津田の態度は母の日陰ものを認め、安んじているかのような形であつた。安んじて——この言葉には文句はあるが、肯定してもいい津田の氣であつた。

そこへ、守山の細君が亡くなつた。すると如何にもその時を待つていたという風に、守山が籍云々をもち出した。

和緒は津田に言うのである。

「この春のことをあの人も思い返すがいいさね。どの顏さげて、と言いたいところじやないか。守山つたらね、信太郎、奧さんがもう駄目だと言われるようになつてから、急に樣子が熱つこくなつて來て、しつッこいたらありやしないの。えげつない位、てれくさいつたらなかつたよ。本當にわたしはもてあましたよ。まるで獸みたいに、夜も晝もみさかいがつかないので、女中の手前、出入りする娘さんの手前、わたしは何度赧い顏をしたことだろう。恥ずかしいつたら、男も年をとると、することなすことが露骨で、脂つこくつてね——」

若し世間の健全な人々がこうした言葉を生みの母の口から聽かされる場合、聽手はいつたいどんな顏をして聞くべきものか、と津田は考えた。するとこつんと來るものがあつた。津田は苦笑でごまかした。

先ず、守山という人間は——

「わしは氣が短い。いつもあとで後悔しているほど氣が短いんだよ。かつとなると、何をしでかすか判らない。時どきそんな自分が怖ろしくなる。だから若しお前がわたしを裏切ろうものなら、わしはきつと骨身に應えるほどお前に思い知らしてやるだろう。何も今更信太郎の意見をきくまでもないんだから。そうだ、わしの顏に泥を塗るような眞似をしたら殺しかねないよ」

と言つてのける性格なので、和緒はすつかり震えあがつたのである。全く殺しかねない守山であつた。

だから早速和緒は逃げだした。發見されたら殺される氣で、かくれた。そして津田に電報をうつた。

津田が和緒の家についたとき、雨がふつていた。守山が疲れた人のように、雨の脚を眺めて頑張つていた。津田が挨拶すると、

「あまり和緒を唆かさないでほしいよ」と頭からだつた。

守山にしてみると、說明の煩瑣をはぶいた譯である。が津田はなにも母から今度の報告をうけていない。母の留守にも深い理由を嗅ぎだせないのである。津田は靜かに、どうして自分がそんな惡者であるような言い懸りをされなければならないのかを尋ねた。

「困るな。こんな場合に白らつばくれて、お互の氣持を惡くするだけだからね」

津田は重ねて呆然とした。

「まあ三人で逢い、ゆつくり相談するより仕方がないよ。この場合肝心の和緒がいなくては始まらないよ。あんただけでは心細い問題だからね」

語尾を苦笑に收められた瞬間、津田はぐつと怺える氣持でいつぱいだつた。が僅かに、和緒の五年間の生活を思い返し、蒼くなるだけで濟んだ。津田は平常、自分でも十分氣がながいとは言えないからである。——

母親は言う。

「それで、お前はどうお思いだい。やつぱりわたしは守山へ入籍す

るのが本當なのかしら。あそこを死場所と定めて、生涯をきめてかかるのが本當なのかしらね」

やるせない表情をする母を眺めて、このとき津田は少しほかごとを考えていた。津田は母の十七の子供であることを思い出している。まるで姉弟だ。人一倍大きな自分に小柄な和緒は姉の形である。かつて母と子は柳ケ瀬を歩き、和緒が若い男と一緒だつたと噂をまいて守山をやきもきさせ、それをしんから和緒は可笑しがつたが、津田はそれだけではすまされない苦い水を感じた。母と子の差別の具體化だ。津田はいつも十七からの母の役割を氣の毒に思つている。津田は小さなころよく泣いた。泣いて泣きやまないと、どうしてあやしてよいものか、心細くなつて十七の母は、津田を膝にのせてああんと一緒に泣きだしたものである。すると姑は、先ず小さな母親からあやしにかからねばならなかつた。

津田は應える。

「こうした問題は一時的感情できめるのは危險ですよ。守山の人格は第二のことでしよう。將來のどうせ母さんと一緒になれない僕たちの世間もよく考えて、母さんの老後の安定という物質的な立場から、いくらか狹くこの問題は極めるべきでしようが」

「それで、お前の考えは」

「母さんの氣持が肝心ですよ」

「いいえ、お前の意見では——」

「母さんは」

こいつ狡いな、と自分を感じた刹那、和緒は突然兩手をつッ張り立上がつてきた。不意だつた。津田はひとたまりもなくどしんと床の方へぶつ倒れた。

「この薄情もの。親にむかつて何という情知らずをお言いだい。薄情もの奴、卑怯者——。負けはしないぞ。言い負かされはしないぞ。負けてなるものか」

全く防ぎようがなかつた。和緒の小さな拳固が、津田の鼻さきをつづけさまに飛ぶ。腕を烈しく上下させて母はぜいぜい息を切らした。津田は一度、したたかに曲つた自分の鼻を感じた。

「そんな無茶な、そんな無茶な——」

こう言つて津田は、自分の顏の上にかむさつてくる和緒の體の崩れるのを支えた。

「お前はこんなとき、わたしを責めるんだ。今まで何も言わなかつたけど、腹の中ではしよつ中わたしを虐めどおしていたんだろう。そうだろう。だから今となつて、ひとが落ち目になつたからつて——」

胸倉をとらえ、小突きまわす和緒の腰に、津田は兩手をあてがつていた。潤んだ眸を見かえして、あながちこの母を虐め通してきたのではないが、まんざら虐めなかつたのでもないと思つた。

「誰が負けてやるものか。負かそうなんて薄情だよ。情知らずだよ。わたしはこれで、誰にも頭を抑えられてはいないんだ。——なんだ。そんな頭髪をわけて、偉そうに、柔道二段だつてちつとも怖かないよ」

津田は靜かに居ずまいを直す。そして、世にも情ないという顏をして、

「ぼくの言い方が氣にさわつたら堪忍して下さい。ぼくは寧ろそう考える方が、いちばんいいんじやないかと思つたんですが」

と言う。しかし凡そ、詫びるという氣持とは相違して母の顏を眺めていると、朗かな當惑感がごろごろと津田の胸の中をころがるようであつた。何か、やわらかい肉感的な當惑である。

「後生だから、ね、信太郎、そんな風に言わないでおくれよ。わたしのして來たことは確かによくなかつたよ。それは十分判つているよ。でも、今となつて責めるなんて、あんまりだよ。あんまりひどいよ」

眸が光り、濡れてきた。そら來た、と逃げる氣持で、しかし泪はやはり痛かつた。がこれで、母の發作も運びよせられる處まで行き

ついたと考えた。その出鼻へ、いきなり「主婦の友」が飛んできた。雜誌は津田に身をかわされて、模糊として山靜かなり花の山、という掛軸につき當つた。津田はすぐ、まるで子供に玩具を拾つてやるという風に雜誌を拾いにかかる。すると、和緒が膝をつめてきた。そんなもの靜かな、動じない津田のようすに腹を据えかねるのである。

「わたしはこれでも、今日の日まで氣の休まるという時はなかつたんだよ。お前を捨てて家出した罰はもう十分にうけているよ。もう澤山するほど苦勞して來たよ。長い間だつたよ。その間には、若し自分さえその氣になるならわたしは何時だつて幸福になれたんだよ。暢氣をしようと思えば、いくらでも太平樂がきめてもいられたんだよ。何のためにわたしが今日まで苦しんできたとお思いなのだい。みんな子供が可愛いからじやないの。お前さえ初めから捨ててかかる氣だつたら、母さんはどんなにも結構な身分になれたんだよ。それが判んないのかい。大學校までいつて、そんな親の切ない心が讀めないのかい。親にむかつて偉そうに意見するのが子供じやないよ。わたしはお前が可愛いから白を切つて守山へ行けないんだよ。若しわたしが守山の人間になつてごらん。一年に五、六回しかお前に逢いたくても逢えないのに、それ以上はたの人達に氣がねをして、思うように逢えないじやないの、今だつて、母さんは、逢いようが少ないと思つているのに——それも、先にお前と一緒になれる見込みがあるのなら嬉しいよ。でも、お前には、異つたお母さんがある。一ト月とお前とわたしは一緒にはいられない義理合じやないの。——なんと言う親不孝をお言いなのだい。ここの道理が、こんなこと位判んないのかい。判つていても判らない顏をして、そうだよ。お前はまだわたしを虐め足りないと思つておいでだろう。さあ、はつきりと言つてごらん。母さんの口からこんなことまで喋らせて、さあ、言つてごらん。はつきりと應えてごらん。人を虐めるにも程があるよ。ひとが落ち目になつているのをつけこんで——、

ええ、口惜しいよ。口惜しいよ」

津田は、があんとうちのめされた。母に對するこれまでのいろんな氣持の痛手や、淋しさやるせなさがいつぺんに蘇つてきた。ひねくれた持前の虚弱さが、洗いたてられたような氣がした。吊しあがつた可愛い目もとから、泪が堰を切りぼろぼろと落ちて來た。泣いている母はまるで子供だ。そんな子供々々した母が、津田は譯もなく好きになるのだが——

その時である。庭石をこちらへ近づいて來る誰かの足音がした。津田は母の手をとると、

「さあ、早く顏をふきなさい。ここはうちじやありませんよ。ほら、誰か來たじやないの」

しかし和緒は濡れたままの顏を、やがて開くだろう障子の方へぼんやりと向けていた。默つて顏を見せたのは女中だつた。

「遲くなつてすみません」そう言つて女中はすぐこの場の變な空氣を嗅ぎつけたように、

「あとはすぐ只今——」早々に引退つていつた。

鮎の魚田である。盃洗の水が場所ちがいのように搖れていた。途中にはいられて、津田はやれやれと思うのである。が、

「お前はいつもわたしを默つて眺めていたね。それが怖かつたよ。何よりも怖かつたよ」

「そうですか」と津田はちよつと目のやり場を探した。「母さんの心に、そんな考があろうとは考えてもみなかつたのです。淺薄でした。今まであまり子供らしく、非人情ぶつて生意氣でした。これからは決して母さんを虐めませんよ。何とかいい方へ向けましよう。これからはぼく、大いに努力しますよ」

誇張したものの言い方も、仕舞いには實感をもつて來、津田は晴晴しい氣になつた。

「さあ、お飲みよ」

酒は富久娘、生一本、母のお酌で盃をあげた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「誰だつてわたしのような運命を望みはしないよ。でも、一度足の向き方がまちがつてしまうと、容易に眞直ぐにはもどつてくれないのだよ。氣ばかり焦つてね。もつとも女のひとりぐらしがどういうものか位、お前にはよく判つているだろうけど」

「判りますよ。しかしその判り方が、母さんの思い通りな判り方でなかつたからつて、判つてない譯じやありませんよ。母さんの不滿はこの判るということの客觀的なのと、主觀的なのとの相違にあつたような氣がするんだけど」

餉臺の端が氣短かにちよつと鳴つて、母は再びこわい顏をした。

「もつと身入れて——」

「はい」と應えた津田は、「入れてますよ。親のことじやありませんか」と笑つた。

「それでいて籍を入れろとお言いかい」

和緒の口調は鐵のように固く、冷ややかであつた。津田はとうとうしてやられたような氣がした。が刺を覺えない氣持で、また何事も逆らうまいと思つた。この母には贊成だけが必要である。津田は言つた。

「守山のことは、何とか解決しますよ。併し、手切れにどうのこうのと言い出しては厭ですよ」

「誰がお前そんなこと言うものかね」

鬢を眺めやつて、ふと守山は可成り大きな體格だつたつけなと津田は思つた。

「いざとなれば何もかも守山にくれてやる覺悟でないと駄目ですよ」そう言つて嚴格な顏をした。

「あの人のものは五、六本の軸とそのほか骨董物が少々あつたかしら。それだけだよ」

そんな話の種類より、この場合津田は魚田をつついている方が遙かに氣が樂な譯だつたが、——津田は守山を描いた。交渉を引受けたものの自信がない、氣になつた。

「勿論、今後絕對にこれまでのような生活は絕つていただけるでしよう。燒棒杭にまた火がついちまつたなんて、厭ですよ」

そう言つて津田はこれは厭な言い方だと腹くなつた。熱い氣がした。素直に自分の言葉に頷く母を眺めて、もう一度腹くなつた。

「わたしも、もういいおばあさんだからね」

その四十二歲を、本當に津田は信じかねるのである。更に本能の過失を重ねるだろう和緒を、和緒自身より津田の方が慥かと豫言出來るからである。この春の出來事がそれだ。體よく捨てられようとして、またうやむやにもとへ戻つて、その後母は別れようともしなかつた。母が弱いのか守山が烈しすぎるのか、そのどちらでもあろうと考える津田の目にうつる平常の和緒は、若くて、あまりに端麗すぎる。津田は和緒と永い間母と子の生活をもたないで來たその所爲か、和緒を母として見るよりも、とき時、ひとりの女として眺めている。不埒な息子だ。津田は母の美貌を恨むなど、そんな芝居氣は持たない。むしろいつまでも、若く美しくあつてほしいと望んでいる。——並んで立つと漸く自分の肩に鬢のとどく、關西風な大きな、豐かな前髮。黑く大きな瞳。鋭い日本人ばなれした横顏。小肥りに皮膚がすんで靑味をもつ肌。自分を打つときのいつそう煽情的な母親。全身で毬のように武者ぶりついてくる血の氣の多い母。感染しやすい快活と移り氣でむずついていそうな、婀娜な母——それ故に、久振りに逢う津田は、母をそつと味わつているような風があつた。

當分は、池の坊と裏千家で生活の道はつづけられていくだろう。が四十二歲が、いずれ第二の守山を作るのである。寧ろ作らない方が嘘だと津田は考える。津田はこうした考え方を恥じるまいと、己に言いきかせ、それで承知する自分の氣であつた。一年に、五、六回、逢つたときだけが母である。餘日の母は、女としての組の方へ入れて置きたい。が、こう考えるのも永年の別々の生活の故だろうと、考えて佗しく、何ともいたし方のなさで、棚の上へという風に

かたづけて、津田は大して良心の咎も感じないのである。
長良橋を津田がかえるとき、金華城上の月は高くて、あくまで明るかつた。

二

二十代の自分が親の痴情をさばかねばならないなど、不幸なことだと、苦味とやるせなさを何時幾度逢おうと、もの別れになる守山との交渉のあとさきに味わわされて、五日目だつた。
津田は法善寺の朝の梵鐘を聞きに出かけた。守山の目をごまかすために三日置いて、晝近く歸つて來ると、隱家に居る筈の和緒が先ず津田を迎えた。
「あの人が自殺したんだよ」
えつ、と言うほどの愕きである。
「わたしの居所が判らないので、あの人は毎日わたしを探してまわつたんだつてさ。名古屋へも四日市へも、一の宮へも、自分で出かけるという熱心さで、それでもとうとう判らないとなつて、朝からむちやくちやにお酒を飲んで、よつぱらつたそのあげく猫いらずを二十瓦呑んでしまつたんだよ。胃袋をさつそく洗淨したんだけど、二日間お腹にあるものがお酒ばかりで、心臟麻痺をおこして昨日とうとう死んじまつたんだよ」
自殺がぴんと來ないのである、嘘のようだと考えた時、津田は母の顏をぼんやり眺めていた。
普段着と着換えて、再び和緒とむかい合つた時、津田の心のなかに興奮してくるものがあつた。
「お葬式は？」
「今日の午後二時と聞いているんだけど」
「當分、うちを出ないようにして下さい」
頷くのを見、津田は急激にくる息切れのようなものがあつた。自分の頰の冷たさを感じた。
「燈臺もと暗しつて、よく言つたものだね。あそこにいたのにとうとう判らず終いだつた。そのくせ、あの人は二、三度あそこへもやつて來ていてね。見つかつたらきつと殺されていたよ。捉えられてごらん、猫いらずの半分は大丈夫飲まされたに違いないよ」
津田は、そんな母の顏を見るにしのびなかつた。津田は死という重い事實をいくとおりに考え直しても、素直にその言葉のもつ實感が得られないのだ。どこやらにうしろめたい感じが殘る。まるで我がことのように氣恥ずかしいのである。また母に對しても、何故自分が氣まりの惡い思いをしなければならないのか、妙な氣だつた。和緒は落着いている。和緒は少なくも自分がことの焦點に置かれているということを氣にかけていない風である。粧つた無神經なのか、津田には判らない。が一應は、その平靜を認めねばならないほどの靜かさであつた。
この母は、守山の死を嗤つているかも知れなかつた。まつたく人人をほろりとさせない、肩身の狹い死に方である。生命の脆さを思うより、輕蔑が先に立つ。しかし津田には一概に笑い切れないものがあつた。和緒のようにすましてはいられない。津田は自分でも十分非人情であると構えているが、この暗鬱な感じは、理不盡な自殺の事後の咎にちがいなかつた。その咎を一體誰が受くべきか、母か——むろん和緒である。津田はそんな責任はもちたくなかつた。持つ意志もないのに、この弱り方は何故なのか。癪だつた。
「僅か二タ月とでない内に、二つもお葬式を出すなんて、いくら守山が大身代でもやり切れないだろうね」と和緒である。
津田は歩いていい、ふと立止まる錯覺を覺える。母の頭には葬式の費用が第一に來るものらしい。これは無茶だ、と津田は、いま少しものごとに動じ易い和緒であつてもよいではないかという顏を露骨にした。

三

午後二時が近づくと、和緒は用もありそうにない階段を上り下りした。その足音をつい、うるさいなと我慢しきれなくなつた時、津田はどきんとした。痛快な、殘忍な、母の氣持の透視ができた。

生憎と、守山の柩が佛式で、歩いて菩提寺へうちの前を通るのである。女親族の白無垢の一行が通りかかると、女中がそれを知らせにきた。津田は、

「門口から覗くのじやないよ」と言つた。

和緒はもう、二階の硝子窓に身をよせていた。津田は母と肩をならべて、柩を見送る氣がしなかつた。業腹である。

「まあ、ちよつとごらんよ、千杜世さんの美しいこと」

手招きをうけて、津田は咄嗟に立上がつた。他愛もない——。

千杜世とは守山のひとり子だつた。ひとり大きな死島田が、長い振袖の白さで濡れているように鮮やかに見えた。彼女たちは言い合わせたように、誰ひとりこちらの二階を見上げるものがなかつた。みんな一様に死の中に一切の關心を失い、如何にも死の悲しみに挫かれた色と動きである。たとい馬が途中で飛び出そうと、彼女たちは深い調子を崩しそうに思えなかつた。が、千杜世の眸だけが、ちらりと二階へ向けられたように津田は感じた。

やがて、柩が長々と町角を離れて來た。

「あの香臺をもつている人が、一番上の兄さんだよ」と和緒は指をさした。

が、いつか和緒の瞳は据つていた。白木造りの華麗な柩が母の網膜にはいる。瞬きもしない。柩は次の瞬間窓の下を過ぎるのである。が母は、目送しようとはしなかつた。ひと所を見詰め、動かない。どれだけか經つて、遲ればせの會葬者がちらほら通るようになつても、母は窓をはなれなかつた。この母は動揺している。と流石に、それ見ろと言いたい氣持で津田は和緒の姿を眺めやつた。

「隨分澤山な人だつたね。女學校の校長先生もいたよ。市會議員もいたよ。ほんとうに近頃にない立派なお葬いだつたこと」

そう母は言つた。そんな風にしかこの母は表現できないのだと、母の挫かれたものが津田の眞正面に來た。そのまま顔を見合せていると、母の表情がだんだん硬直していくようである。窓によりかかつている。どこまで硬直していくか、捨てて置いたら泣きだすかも判らない。津田は何とか言葉をかけざるを得なかつた。

「どんな氣持でした」と笑いにした。

「立派だつたわね。あんな立派なお葬式をしてもらえる位なら、あとに心殘りがない。死んだ當人もさぞ滿足してるだろうよ。ちよつと羨しかつたね」

如何にも羨しそうな和緒である。放鳩、花環、盛花、造花、如何にも傘問屋の大旦那の死にふさわしい澤山な會葬者——莊重で、美麗で、仰々しく派手だつた。津田は漸く柩の中の人が守山であろうと、そんなことはこの母の感激の內容にかかわりのないことに氣がついた。和緒は多分、通りすがりの葬式にでもこれと同じ表情を見せることであろう。

「ちつとは守山を氣の毒に思わないんですか」

と言えば、和緒は、

「あほらしい、二十代の娘じやあるまいし」と凡そ、情事に緣遠い顏をするだろう。

愛と言う言葉が四十代ではてれくさいなら、てれくさくとも構わない、よし愛していなかつたとしてもよい、が、自分のため自棄をおこしての自殺である、いずれ愛欲の仕業である。だとすると、そんな激しい愛欲の渦中にあつて、しかも柩を見送つたいま、こう平靜に構えていられるなど、無茶苦茶だ。死身じやあるまいし、多少の感慨もあるだろうじやないか——。それにひと一倍血の氣の多い母の持前としても、と考え疊みこんで、津田は持つていきどころのない不滿を感じて晝寢の姿にころがつた。

津田は自分の意見のために慍るのではない、母のために慍るのであると說明をあたえ、憤怒した。

夕餉の時。

和緒は津田以上に、いろんな食卓の小皿に箸をつけるのである。晝間の感情など、おろかなことだ。母の健啖は津田の氣を惡くした。津田は腹が空いているのか、いないのか我ながら判らなかつた。空いているような氣もするが、何も食べたくない。せめて——と津田は考える。食事をいま少しひかえ目にするという、仰山でないやり方で、和緒の守山に對する女らしい氣の弱りを見せてほしいと思うのである。二杯目のごはんを一つにし、その間むだ口はきかず、伏目になつて、ただ何となく弱々しい面もちで、

「わたし、なんだかまだお腹がくちいので」

そんな奥行のある母親を見せてくれたなら、津田は、——或いは津田はその場合なんと慰むべきか、こまるだけか判らなかつた。

四

上京の前夜津田は母と一緒に柳ケ瀬へ出た。柳ケ瀬は紛然と動いていた。

「魚鐵へ行こうよ」だしぬけに和緒が言い出した。

「いま頃」

「なあに、若し部屋がふさがつていたら、ほかへ行けばいいよ。橋の上から鵜飼を見るだけでも結構だよ。とにかく空いているかどうか、訊いてみようよ」

そう言つて和緒は、公衆電話の方へあと戻りした。その姿を見送つていて突如、津田はこの數日來どんなに外からの力を加えても生じなかつた和緒の一面を偶然に發見した。

魚鐵とは、五年前和緒が守山の世話をうけるという話のきめられた思い出の料亭である。顔にこそ出さないが、思い出を思い出し、うかつに魚鐵と言つたのだろう。遠い記憶へふと心が滑りこんでいつたものと解して、構うまい。そう考えて津田は微笑した。和緒は津田にとつて生みの母である。がこの母は、同時にまた何物かでなければならない。このとき、和緒の上にひさしぶりに新鮮な女を感じた。

だが、待てよ——。津田は飜然と思いかえすのである。この母は急に鰻がたべたくなつたのかも判らない。魚鐵自慢の割烹である。和緒の非人情なら、當分津田はもう澤山だつた。

津田はやがて戻つて來そうな母を、どういう顔で迎えようかと考えた。

（昭和七年四月「文藝春秋」）

厭がらせの年齢

夜の便所へ、廊下を行くと、「どなたですか」出しぬけに必ず聲がかかつた。靜かな聲で、待ちかまえていたというほどではないが、おどろいて寢とぼけた調子とも違つていた。宵から一睡もしていない、冴えた頭から出る聲である。聲だけで、その部屋に誰かがいるという感じは少しもあたえないのである。闇の中から、聲だけがぽかりと拔けてくるようであつた。闇の中でも、年をとつた女の聲調は紛れもしないのである。ぎよつとさせる。そこにうめ女が寢起きしているということは忘れていないにしても、不意を衝かれる。「あたしよ」通行人はいちいち自己釋明をしなければならない。それが孫娘の仙子や瑠璃子の場合なら、何でもなく通るのだつたが、伊丹の時には、一ト言の挨拶もして貰えない。無視される。しかし、無視されるだけならその夜はうめ女にとつて運はよいのだと言わなければならない。或る夜の如きは、そこを通ると必ずぎいと鳴る廊下の或る個所のように、「どなたですか」と聲をかけると、足音はぴたりととまつた。

「わしだよ、婆さん、何か用かね」

うめ女としては、足音の主に一ト言の返事をして貰えば、氣はすむのである。いや、返事も當てにはしていない。そこに足が來れば、いかなる場合にも、ぎいと鳴る廊下の軋りのように聲をかけるにすぎないのだつた。闇の六疊の牀で、うめ女は背を丸めて、石のように動かない。聲をかけたくせに、自分の口がそう動いたということさえ、はつきりと意識に置かないのである。

「何か用かね、婆さん?」うめ女は默つている。言うことは、もちろん何もない。「やり切れんよ、婆さん、自分の家じゃないか。ここはわしの家じゃないか。自分の家のどこを歩こうと、わしは誰にも許可を得る必要はないんだ。いちいち咎められて、たまるものか。第一婆さんは、いま何時だと思うんだ。眞夜中じゃないか。夜になると、夜どおし目をさましていて、晝間は死んだように睡つている。まるで盜人だ。氣味の惡い、ぎよろ目で、みんなが寢靜まつているこの家の中の樣子を伺つている。みんなの寢息をうかがつている。その格好を考えただけでも氣持が惡くなる。夜はみんなと一しよにおとなしく睡るんだ。年寄りなら年寄りらしく、もう少し可愛げのあるように振舞つて貰いたいんだ」

たださえ靜寂な眞夜中に、聲を張りあげて極めつけたので、家中のものが目をさましてしまつたのは仕方がない。案外、隣家にも聞えたろう。隣家といつても、生籬と一間の道路をへだてているだけに、時々隣家で便所の戸を閉めたり、廊下を歩いたりする眞夜中の音を、自家のように錯覺をすることがあつた。伊丹がぷりぷりして寢室にかえつて來ると、「どうしたの、お婆さん?」と、仙子が枕許のスタンド・ランプをともしていた。

「不愉快だ、自分の家という氣がしないんだ。あの婆が、舌をべろりと出しているのがよく判るんだ。狸婆め、いやがらせをしているんだ。何もあの婆に、いちいち許可を得て、便所に通わなければならないという道理はないんだよ」「退屈だからお婆さん、何となく聲をかけてみたくなるのよ、一ト晩中起きているんだもの」「お前は身内だから、何でもなく思えるのだろうが、わしには萬事が厭がらせとしか思えないのだ。猫被りじやないか、ぬすつと婆じやないか、ひとが見ているところでは、歩行も難儀らしく、切なそうに、よたよたと、足を摺つて歩いているが、誰も見ていないとなると、しやんと腰をのばして、とつとと歩いている。壯者のようにしやん

と歩いている。誰かに見られると、とたんに、立つているさえ、やつとの思いだという芝居をしてみせるのだ。わしには耐えられんのだよ。ちよつとでも人目がないと、この部屋にしのびこんで、引出しをあける。手あたり次第に盗んでいくんじやないか。わしはうちに泥棒を養つておくだけ、氣持は寛大ではないんだ」「だけど、もう八十六歳よ、昔からの癖で、ひとにものをやることが好きだつたから、しよつ中何かを持つていたくて、あなたのものを取つたのだけど」「わしの財布から、金を盗んだ」「子供にかえつているのよ」「冗談じやない、あの小さなからだの中には、八十六年間の悪業の澱がこりかたまつているんだ。金が欲しけりや欲しいといえばよいじやないか。誰もやらないとは言わないよ。それを默つて盗むという根性が、わしには我慢が出來ないのだ。何かやる相手がいなくなつてるのに、やはり盗人根性は直つてないじやないか。美濃部が疎開にかこつけて婆をこちらに押しつけてよこしたのも、あそこでも我慢が出來なかつたからだ。第一あの婆のために、お前ら姉妹は年中いさかいをやつてるんじやないか。たらいまわしにして、たらいをまわされた家が、家庭をめちやくちやにされて、——癌だよ。あの婆が生きている間は、お前らは安心して姉妹が愉しく交際が出來ないんだ。ほうり出してやるがいいんだ。明日にも、外につき出してやるがいいんだ。いま時は、誰だつてあそんで、何もしないで食べていることは出來ないんだ。働かざるもの食うべからずじやないか。野倒れ死にするなら、死ぬのがいいんだ。わしは、ふつと自宅にかえるのが嫌になると、したくもない宿直をやつた方がいいと、度々會社で泊つて來るんだ。自宅にあの婆がいるかと思うと、自宅にかえる氣もしなくなるんだ」「働けたつて、そりや無理よ。それに追い出したなら、お婆さん、あなたの名を言うわ。美濃部の名をいうわ。養老院に入れるにしたつて、こちらに扶養能力がない場合に限るんだから、斷られることは極つてるでしよう」「そういうことを、あの婆は、ちやんと計算をしているんだ。ひとくせも二タくせもある婆なんだ。わしは近い内に、一週間も二週間も續けて會社に泊るようになるかも知れないよ。お前だつてやり切れないだろう。婆が來てから、三か月間、わしはしよつ中苛々してるんだから」「これはもう理屈では、どうにもならないことなのね。あたしは、ただあの虱には困るのよ。汚いつたらありやしないわ。氣をつけてあんなに風呂に入れているのに、昨夜も、何氣なく自分のふところをあけてみたら、大きいのが一匹いたわ。ぞうつとしちやつたわ」「しかも、食氣だけは一人前と來てるんだ。配給ということがてんで判らなくて、こちらがけちけちしてるとばかり思つてるんだ。飯ぐらい腹いつぱいに食べさせたつていいだろうと、恨んでいるんだ。恨んでやると憎まれ口を叩いてるじやないか。わしの呪いには間違いがない。呪つた奴は必ず死ぬと言つてるんだ」「いつそんなこと言つてて？」「この間だ、ほら、大宮から、もと婆が下町で使つていたという松子が來た時に、松子にそう言つたというんだ」「若しそれが本當なら、わたしも考えなくちやならないわ。世話をしてやりながら呪われていちや、そんな理屈に合わないことはないわ」「お前ら姉妹は、何もあの婆にそれほど世話になつていないじやないか。お前も幸子も、自分の力で結婚してるんじやないか。だからあの婆は、お前らはちやんと結婚式をあげていないから、野合だと、今だに厭がらせを言つてるのだ」「美濃部のところへ、かえしてやりましようか。三か月世話をしたんだから責任は立つわ」「幸子が何といおうと、仕方がない。ほうり出すわけにいかないなら、それ以外の方法はないんだからね」「幸子たちは、終戰間際に山村に疎開してるんだけど、何もそうそうちが犠牲になることもないわね」「お前ひとりの婆さんじやないんだよ。お前はあんまり人が好すぎるんだ」

その結果己の好人物をつつぴどく罰する意志のもとに、仙子はうめ女を、茨城縣下の今だに電燈のない山村の、農家の二タ部屋を借りている美濃部のところへ、荷物のように運ぶことに極めた。なん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com